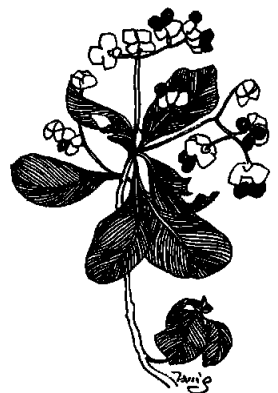


雲南動物研究所と植物研究所を尋ねて

長井博



私は去る七八年の七月に、両研究所を訪問する機会に恵まれた。

雲南省は台湾とほぼ同じ緯度に位置し、ビルマ・ラオス・ベトナムに接する国境地帯である。およそ海拔二〇〇メートルから四〇〇〇メートルまでの標高差があり、熱帯・亜熱帯から万年雪をたたえる環境までを含んでいる。面積は日本の本州と同じくらいであろうか。野性動物植物の最も豊かな省である。鳥類に限っていえば、中国生息種の半分以上を占めているというから、軽く一、〇〇〇種を越す計算になる。またその豊かな自然環境の中に、二十余の少数民族がそれぞれの文化を維持しながら暮している。われわれから見れば、不思議な魅力を絵に描いたような地帯である。

省都昆明市は、台北と同じ緯度に位置しているが、海拔一、九〇〇メートルのために年中、春のような季候だという。私が尋ねた盛夏でも、朝夕や雨天の日には上着がないと肌寒いが、晴天になるとたちまち気温が昇ってしまう。緑が多く、空気のとてもおおい町である。この昆明市の郊外に、中国科学院（注一）直轄の、雲南動物研究所と植物研究所がある。

■雲南動物研究所

同所訪問に関しては、「北海道新聞」十月四日付夕刊に掲載されているので、簡単に紹介しておく。

同所を尋ねたのは七月二十四日の早朝で、つい時間も昼食も忘れて交流し、辞した時はもうたつぷりと午後に戻り込んでいた。同所での交流は、私の希望とはかなり違った形になってしまった。中国の野性鳥獣行政や、研究の実情を詳しくたずねたかったのだ

が、私の方が逆に質問責めにあつて、ほとんど何も聞きだせなかった。しかしその質問の内容から、彼らのかかえている問題を感じとることができたように思う。

まず中国科学院が設置されたのは、解放直後の一九四九年十一月である。一おそれく、生産や軍事に直結する部門の研究分野が、いの一に科学院の直轄になったのである。その当初から動物研究部門も直轄になったかどうか、私は知らない。多かれ少なかれこの国にも共通しているのは、野性動物研究は植物研究よりも充実していないということだ。私の知る限り中国もその例外ではない。鳥類分類学者の鄭作新（注二）氏の名前と、所属する北京動物研究所の名はよく知られているが、雲南省にも動物研究所があることは、訪中してみるまで知らなかった。

研究所の建物はまだ新しく、そのまわりの環境もまだ十分に整備されていないように見えた。展示されている標本も、雲南省としては貧弱にすぎた。特に昆虫部門はひどい。おそらく設置されて、まだ日が浅いのであろう。同所でまず四人の鳥類研究者に紹介された。鄭宝賚（注三）、彭燕章、匡邦郁、柳嵐の各先生である。皆、四十代の年齢に見えた。いずれも「動物学報」（注四）で分類学分野の報告文を発表している、なじみの名前である。

彼らの表情は明るかったが、なぜか過去に影を背負っているように感じたのは、気のせいばかりではなさそうだ。それは、研究上の苦労からくるものではなく、プロ文革中の彼らに対する圧力と処遇のなせる業に思われた。文革中の彼らの論文を私は知らない。他の多くの学者同様、修正主義のレッテルを貼られ、研究職を追われていたのであろうか。その時代に、多くの図書、資料、標本が散逸してしまったという。

私は素人ではあるが、彼らにとっては初めて対面する外国の研究者？ではなかったらうか。彼らの表情には、ありありとそれが読みとれた。とにかく四対一では多勢に無勢、私は質問の矢面に立たされてしまった。彼らの質問は、切実な問題ばかりであった。繁殖や生息鳥類の調査のやり方、その識別に使う図鑑類、野鳥研究者人口と団体組織、人材育成の問題、これらにかなりの時間を費した。多分彼らの調査は、個体を捕獲してしまふのである。民間の愛好研究者は、おそらく皆無に近い状態にちがいない。鳥類研究分野に限って言えば、世界のトップレベルに比して二十年以上も遅れている可能性があると感じた。

ちなみに北京滞在中、一般書店や古本屋などをかなり念入りに探し歩いたが、鄭作新氏の「中国鳥類分布名録」以外は、たった一冊の鳥類に関する本もなかった。プロ文章以前に教種の本があったことを考えると、その期間の彼らの挫折は惨たんたるものであったのだろう。いたましいかぎりである。

■雲南植物研究所

昆明市の、うっそうと繁る街路樹と密生した生け垣の長いトンネルをくぐり抜けると、そこに植物研究所があって、その前庭にはリュウゼツランの花が建物よりもさらに高く天を突いていた。

われわれはまず、中国科学院々士で六十二歳になる矣征鑑（注五）先生の部屋に通された。十坪ほどもありそうな室内の壁は、内外の専門書で埋っていて、机の上や他の空間もかなりよく整頓されていた。接客テーブルの上には数通の手紙が置かれており、英文のものも見つけられた。そこでお茶をすすめられながら受けた説明は、およそ次のようなものであった。

中国開放前と同じ場所に半官半民の植物研究所があり、それは八人の研究者と二〇〇冊の本があるだけという細々としたものであった。一九五八年から現在のように（注六）なり、現在では三三〇人の研究者職員がいる。

同所は現在、主に四部門の研究に力を入れている。まず植物分類、植物地理などいわゆる区系に関する分野であり、氏はその専門家である。雲南省には一〇、〇〇〇種以上の植物があり、熱帯植物に関しては、ラオス国境近くの西双版纳（注七）に熱帯植物研

究所を新設し、元同所に居た蔡希陶（注八）先生がそこに転出している。また、古代の出土文物に含まれる植物の鑑定も、氏の仕事の一つである。

次は植物化学成分の研究である。これは主に薬性々分の研究という印象を受けた。この分野では、雲南医学院（注九）の薬理研究室と提携して研究を進めている。採取栽培した薬草を直接工場に入れて、薬品を製造するようなこともしており、新薬抽出ではかなりの実績をあげているという。

三番目は植物生理の研究で、移植や品種改良の研究を行っている。ただし、いわゆる農産物の品種改良は、雲南省農業科学研究所という別の機関で行なっているという。私が見た印象では、材木になり得る樹木や、觀賞用になる椿などの品種改良に力を入れていると感じた。土の入った壺を接ぎ木した部分にとりつけてたくさんの苗木をとる方法は、氏が世界で最初に成功させたものだという。

四番目は、植物の成長に関する研究で、このために小さな植物園がある。氏は「雨が降っているが……」と前置きしながら、われわれをうながした。

植物園をすみからすみまで見学したわけではないが、何ごとでもスケールの大きい中国としては異例の狭さで、北大植物園よりも小さく感じられた。子連れの老婆や農夫のような人にも出逢ったが、遊び場に当る広場はなく、通路を散策するだけのようであった。北大のそれに遊び場の要素が強いとすれば、ここはまさしく研究の場に思われた。

タイワンズギ、ヒマラヤズギ、その他の針葉広葉樹など、樹木の多さが目だった。自然環境がそうさせるのであろう、樹木の幹はどれも苦むしていた。われわれの頭上ではホオジロムクドリが、いかにも南国産特有の鳴き声をあげていた。

園内の一角には温室があつて、その中で栽培されている植物のほとんどは、薬用になるものであった。われわれ一行五名のうち二人は、漢方薬にも造詣の深い魔術師で、彼女達は避妊、風邪、結核、癌などの説明を克明にメモしていた。この温室の広さも、北大植物園のもの半分以上の規模に感じられた。一巡して門を出る頃には、写真も撮り難いほど薄暗くなっていた。

われわれは、さらに別の建物の植物標本室に案内された。そこでの一番に出逢ったものは、雲南省で出土した稻もみの化石であった。それはもう大粒の砂といった感じのものであったが、日本の食文化を考えると離れ難い感動を受けた。この標本室も、やは

り薬用植物と樹木の標本が多かった。雲南名物の椿の花のカラー写真や、すでに食用のために栽培しているというキヌガサタケの標本もあった。

再び研究所の本館にもどると、接客室を開けて待っていた。世界の茶の発祥地である雲南の暖かい緑茶が、テーブルの上に置かれていた。氏は、ソファに腰をおろすと茶をすりながら「日本は松喰虫王国として有名だが……」ときり出した。エコシステムを採用しなければ当然起こり得るといふ予測は、数十年も昔からあったはずだといふ。いまにいたって薬剤の空中散布をやり、生態系の破壊に追い討ちをかける意味が、どうしても理解できない、と首をひねっていた。

氏の雑談の中心は、植物形態学・系統学・進化生物学など区系全般に渡っていた。氏はいままで幾つもの学説をうちたて、数多くの実験に成功しているという。そのことで欠かれないのは、外国の学者との交流だそう。四人組（注十）の時代には、交流に対して圧力をかけられたが、氏はそれに抵抗して交流をついに中止しなかったという。氏は交流している学者の名前を、次々に紹介してくれた。アメリカやオーストラリアの学者に混じってクサノとかハラヒロシの日本人もボンボンと飛び出した。少し間を置いてから声を落として「親しくおつきあいでいた池田金八先生が、最近亡くなられました。すぐ弔電を打ちましたが、とても残念です」とつけ加えた。

われわれは雑談の最後に、中国でいうところの経済動物とか経済植物の、経済の意味をたずねてみた。動物研究所での同じ質問に対しては、利用価値がある、役に立つという答えであったが、氏の場合は少しニュアンスが違っていた。定説があるわけではないが、簡単にいえば、役に立つということになる。しかし生態系の中で全く害しか及ぼさない生物がいるだろうか？「私はいないと考えている」という。単に食糧や薬品になる意味を越えて、人類の文化とかかわる生態系の中で、解明され、かつ利用されている意味で役にたっているものが、現在の経済植物であると氏は考えているようだ。研究が進めば、どんな経済植物に含まれる種類がふえるはずだといふ。

帰りぎわにサインを求められた。私が書きはじめると、たどたどしいながらも正確にナガイと発音した。驚いて振り向くとやさしい視線がそこにあった。これは日本の学者と交流しながら独学で覚えた日本語だと直感した。（注十一）

帰りのわれわれを乗せたベンツが発車すると、氏はすぐ踵を返して研究所へ入った。

そのうしろ姿には、何ものにも屈しない動かし難い学者の重厚さが感じられた。

もう故人となられたが、かつて中国科学院々長の要職にあった時代の郭沫若氏と会見したことがある。林彪国防総の横死一ヶ月前で、まだプロ文革の渦中にあり、上海組（注十二）は意気盛んであった。氏はいささかしよぼくれた面持で「私はいままだ、死んでも死にきれない」とつぶやいていた。それから七星霜、動物研究所を尋ねてみて、傷跡の大きさに驚かされ、かつその言葉の意味を実感させられた。中国の研究者は、文革中の遅れをとりもどすために、必死で研究を進めるであろう。彼らは、日本の研究者との交流を強く希望している。どの分野の学者も等しく希望するところであろうが、科学院という政府直轄機関である以上、生産技術に直結する科学部門から窓口が開かれ、鳥類はあと回しになるのであろう。がそれも、もう時間の問題に思える。いましばし、中国内情勢に多少の混乱が起きても、これ以上科学分野に圧力をかけられないのが、時の勢いというものだ。私はそう思う。

（日本鳥学会・北海道文化財保護協会々員）

△ 注 釈 ▽

- 注一 日本 の 序 に 当 る か？ 雑 誌 「 人 民 中 国 」 七 八 年 一 〇 月 号 に 特 集 記 事 あり。
- 注二 世界にその名を知られている鳥類分類学者、七十五歳で現職。主要な論文のみでも百を越えると思われる。
- 注三 四十代と思われる女性研究者。十余年間、鄭作新氏の助手を勤めたという。姓から考えて、あるいは鄭作新氏の令嬢か？不明。雲南動物研究所鳥類部門の一番の実力者らしい。
- 注四 定期刊行の専門誌。日本でも購読可能。
- 注五 雲南省の植物に関する著作物多数あり。
- 注六 現在のよう、の、のの意味不明。雲南植物研究所の前身は、昆明植物研究所と呼ばれていたようだ。一九五四年に周恩来総理が同所を視察している。
- 注七 朝鮮戦争における米軍の枯れ葉作戦の被害を、全世界に訴えた中国人植物学者サイ先生と同一人物ではなからうか。「人民中国」七八年十一月号に、氏と熱帯植研のいきさつが詳しく紹介されている。六十二歳。
- 注九 医学院といえは、附属病院を併設した医科大学のことであり、対症療法の西洋医学を主にしたものである。鍼灸・漢方を主とするものは中医学院と呼ばれている。
- 注十 張春橋、江青、姚文元 王洪文の四人が追放されてから、四人組と呼ばれるようになった。
- 注十一 日本 の 侵 略 時 代 に 覚 え た 日 本 語 と、 大 学 で 覚 え た も の、 独 学 で 覚 え た も の に は そ れ ぞ れ 少 し 違 い が あ る。
- 注十二 四人組と呼ばれる以前までは、上海組と呼ばれていた。